小山工業高等専門学校研究紀要
第四五号（二〇一二）一四五－一五四

史料紹介　暇之記　―下館藩主　黒田直邦による正徳三年の記録（二）―

Historical Material　―“*Itoma- no- ki*” written by KURODA, Naokuni ―

酒入　陽子[※1]
Yoko SAKAIRI

The old document named “*Itoma-no-ki*” was written in 1713, by Naokuni KURODA, the Feudal Lord of Shimodate. This modest contribution of “*Itoma-no-ki*” assists in further analyzing the relationships between different regions in the Edo period.

KEYWORD：Historical Material, Edo period, Shimodate

はじめに

「暇之記」は、国立公文書館内閣文庫所蔵の江戸時代の記録である。筆者、成立年ともに明記されないが、その内容から下館藩主黒田直邦による正徳三年の参勤交代時の記録であることが判明する。直邦は、将軍綱吉・吉宗に重用された大名で、荻生徂徠や林羅山といった当代きっての学者との交流も深い。また、為政者の心構えを説く政道書を多く執筆すると同時に、儒仏神三教一致思想を説く「先代旧事本紀大成経」の注釈書（「鳴鶴鈔」）を執筆した学者でもある[1]。

本史料は、下館藩主である直邦自らが、領地での生活や人々の様子を記している点でも興味深い。正徳三（一七一三）年四月一四日から同年秋までの全記録のうち、紙面の都合により、今回は正徳三年五月一〇日から六月一五日までの記事を掲載する[2]。

凡例

一、「暇之記」は、国立公文書館内閣文庫所蔵の写本を使用した。縦帳、七四丁。表紙に「暇之記」、内表紙に「いとまの記」と記される。

一、読みやすくするため、原文に次のような修正を施した。

1. 行改めは原文と一致しない。
2. 変体仮名は平仮名に改めた。
3. 漢字は、原則として原文のままとしたが、異体字や旧字等は適宜残したものもある。
4. 意味判読上必要と思われる場所には、読点「、」を加えた。
5. 濁点・半濁点を適宜に施した。
6. 原本にある濁点には、傍点「・」を付した。
7. 慣用的に用いられている〆（して）・ゟ（より）、はそのままとした。フ（こと）・ゟ（とき）等は、平仮名に改めた。
8. 踊り字・繰り返し符号は、漢字は々、平仮名は〻・ゞ、二字以上は〳〵・〴〵とした。
9. 本文中に見える地名・人名・難解な用語等には、注番号（一、二、三…）を付け、末尾で説明を加えた。

いとまの記

十日　毎月城下の寺に住せる観音寺・清瀧寺・尊像寺三などいふ僧を招じてときまいらす、夕つかた中庸四の講釈、しらずよみにして家僕にときき聞す、をよそ今、人のまねぶ所は儒釈道のみつとはいへど、道家のみちは此国にせんど五まねぶものまれなり、この国の神の道ともに三つ也、をの〳〵好みにしたがひてまねぶべきぞ、中にも人の道のくはしきは聖人のをしへにすぐるはなきぞ、聖人は本より人也、われも人ならばまなばゞいたるべきものぞ、まねぶとは聖人のをしへをならふて身をおさむるをいふぞ、をしへのふみおほかれど、易をもて至れりとす、周子・程子六など云人、千載のゝちに出て、かんがうる所はみな易書なるぞ、されど学者の入るべきは四書七を先とすべし、よく四書をこゝろえぬれば易も詩書もひとりこゝろうるものぞ、去年大学八をよみてをはりぬれば、ことしは中庸をよまむ、程子のをしへとはつゐてたがひぬべけれど、つゝまやかなるにまかせて中庸をよむなり、中庸はをよそにこゝろえては得がたき書也、まづ中といふものいとしれがたきもの也、かたはらまねびたるものも、みな心〳〵にいふほどに、かれがいふと、これがとくとはひとしからぬぞ、中と云を中分とのみこゝろえぬればたがひあるぞ、先儒も堂の中は家の中にあらず、家の中は国の中にあらずといへるぞ、中ははしにあらず、なかにあらず、理のまげたるにあらず、理の直なるにあらず、はしにも中有、中にも中有、まげたるも中也、直なるも中なり、これみなその時と事とによりての中なるぞ、されば中と云は、まことのすがたにて、天地にみちはまりて有物ぞ、このゆへに色かたちのいふべきなし、一事〳〵のかろきにも中有、みなその一事の誠のたつ所ぞ、又四方と中とあらんに、四方をさりて中をのみゑらびとらへたらんは中にあらず、中におれば四方をのづからそなはりて有ものぞ、たとへばまはり火とりといふもの有、外のかなまりをば時の中と事の中とにたとゆべし、うちの火とりは理の実になぞらふべし、金まりに上下前後左右あるぞ、これをころがすに、上にありても下に有ても、および前後左右、そのある所にしたがひて処するに、うちの火とりは、はいをちらさず火をたもつぞ、もしこれが上下に有ては、前後左右をのぞき、前後左右にありては、上下を捨ば、火とりの火をばたもちがたし、たゞこれはたとへなれば、金まりと火とりと二つのもの、まことは時の中と理の実と二つにはわからぬぞ、たとへば又夏の日は水をのみ、冬の日は湯をのむぞ、湯と水とゑらぶべしや、夏はひやゝかなるをこのめばこそ水をのめ、湯をものまんぞ、水にかたよらば中にはあらざるぞ、このさかひはこと葉にもつくしがたし、さればよく中を執るものは聖人也、聖人は天地にみちはまれる徳をもて、事ごとについて、をの〳〵そのみちはまりたるみちをおこなふ、この故にかたづく事、をのづからなきぞ、そのみちはまるとは誠のかたち也、誠とは真実無妄と注せるぞ、一なれば純なり、純なれば誠也ともいへるぞ、一といひ純といふは、みちはまれるをいふぞ、誠にも天地の誠有、聖賢の誠あり、愚不肖の誠あり、天地のまことは天地にあまねくみちはまりて、毛すぢほどもひますきはなきものぞ、聖人これにおなじ、賢者より已下も、をの〳〵見解ばかりはあるものぞ、見解と云にもつゐてあり、そのきはよりみると、遠くよりみるとのわかちぞ、そのきはよりみるものはくはしく、とをくみるものはあらましなるぞ、見たがへもおほきぞ、そのきはと遠くとのわかれは、学才にはあらず、修行の至れる地位ぞ、愚不肖の誠は、たゞ一念一事の実のみ也、しからば聖人より下は、中はすべからずしてむなしく、やむべきならむといはく、しからず、聖人の道は上下に通ず、愚不肖も又おこなふにたへたり、一念一事の誠は、だれもあるものなれど、たゞその誠おしわたりて純一にならざるぞ、純一ならざるはわたくしをまじゆるにぞ、心とまじゆるも有、心ならでまじゆるもあり、をろかよりまじゆるもあるぞ、つとめてわたくしをまじへずば、あたらずといふとも遠からず、わたくしをまじへずは、などか一にならざらむ、一にしてわたくしなくば、などか純ならざらん、純にしてやまずは天地にみちはまれる誠にて、前後左右みな中にあらざらめや、文明はよむ所について、ふしんあらばいふべきなど、したりがほにいふもおかし、けふは序のうちをよみてをき

ぬ、

十五日　家僕の亭にゆきてあそぶ、夕かげ九に蹴鞠あり、城下の町にある者三、四人、家の子どもゝくはゝる、田舎のくつ下一〇にはげしうもあらず、夜に入て月いとよし、

緑ー樹蓋レ隣ヲ濃ー露瑩ク　今ー宵望満チ暮ー雲晴ル
娟々タル月ー色照スニ茅舎ヲ一　偶ク拂テニ紅ー塵ヲ一心ー事清シ

十九日　小栗山の神明一へまうでぬ、城より二里ばかりもあるらん、みちすがらはみな田はたの中をとをり過て川あり、小栗川といふ、かちわたりなれば馬にてわたしぬ、城にてやしなひをける犬もつき来りしか、先のものゝわたるをみて、一もん字に川へ入てをよぐ、水はやければ、二、三間はながれながらむかふへこしぬ、犬の川こすはつねの事なれど、はじめてみるにぞめづらしくおぼゆ、すこしゆきて、むかし小栗の判官一二といひし人は、しかとしたる事はきかねど、その城跡といふ所、井手の庄司がやかたの跡と云も有、いまは民の家居となり、田となり畑となりて、わづかに十間四方斗なへ木の杉などうへ廻して、その跡ばかりを残せり、まことに古木などもありつらめど、いつの世にか薪にもくだかれぬらん、桑田のかはる世も有ぬべければ、跡といふものもつゐにはうせて、名をしるものもあらじかし、あはれなることよとみすぎぬ、なをゆけば古き鳥居たてり、きけば神明の外の鳥居也と云、下馬はうちなるよしいへば馬にてゆくに、あやしき五、六寸四方なる板のおもてに、さいの目の六を二つならべたらんやうなる、黒きほしを十二つけて、棹のさきにかけをける物有、これは何ぞととへば、飴のかんばんと云、いでやそのあめはといへば、所の名物なりとてもてくをみれば、まことかんばんのごとく、江戸にてぎやうせん一三といふあめを、まろくひらめてかみにつけたるなり、水に入ればかみをのづからとれぬと云、いなかには目なれぬ事のみおほかり、御はしの前よりおりたちゆく、御橋の長さ四、五間、はゞ九尺ばかりもあるらん、そりはし也、かうらんのかねにきざめるをみれば、天正二年一四と有、後に修覆せるとみえたるには、延宝一五の年号也、わづかのみたらしあり、つねはいとよくすむといへど、けふは水にごりて清からねば、茶の水をもたせたるにて手あらひきよめて御宮を拝しぬ、御宮は両宮也、内宮、外宮をうつせるよしいふ、みやたち神さびて一六いとたうとし、社領も五十石つきぬと云、ふとまうでぬれば社人もしらで出あはねば、心やすくてこゝかしこ見ありく、みはしよりうちに、大なる杉のかれたる二木有、一もとはたをれて、そばなるかれ杉の枝にかゝり、なゝめによこたはりぬれば、根は土をうがちて出たる所三間余も有べし、みきのふとさ五間もまはるべしと云、おびたゞしき古木の、をのれと齢ひをはりてかれたるなめり、つた・かつらはひまとわれて、をのづから緑の色はなをうしなはずみゆ、かの枝をうけたるかたはらなるかれ杉も、をよそにはみえぬ大木なり、神木なればをのがなりに人もいろはざるべし、みな此山開闢の時より年ふりたる古木とみゆ、うしろの山はそのかみの城跡也、松柏おひしげりて、やゝたかき山なり、おなじ山つゞきに一だんたかき所有、木のね・つた・かつらなど、よぢてのぼりぬ、これよりみれば、をぐりの山つゞきはまちかくむかふにみえ、はるかのたにゝは目のおよぶかぎり田はたつゞけり、むぎのまだみどりなるも、やゝ色づけるも有、田はうちかへしたるのみにて所〳〵苗代のあをくとみゆるもあり、川二すぢにながれて、この水を用水に入るとみえたり、せき二所にみゆ、むしろせきとかいふて、上をば水をながす堰なり、さゞ浪たちていさぎよし、山はおほくはみな松なり、杉・ひのき、しらぬ木もおほくみゆ、なを一だん高き所あり、のぼりて見るに風景ははじめの所もかはらず、やすみおるにたよりあしければ、さきの中だんへかへりて、すこしたいらかなる所にせんしかせ、こゝにて供なる者に酒たうべさす、みづからもしばらくやすみおり、絶句うかびぬれば、かきとめをきぬ、

遙攀ニテ蘿薜ヲ一到ル二峯ー頭ニ　溪水潺ー溪トノ紆ル二緑疇ヲ一
開ー闢ノ枯ー杉今尚ヲ在リ　神ー仙常ニノ鎮ノ二此山ニ一遊

ちかみつ（親誠）一七、韻をつぐ

遠過二澗一底一上二山一頭一　耕一客向レ田遶二翠一疇一
弾レ瑟ヲ松一風流一水ノ響　金盃催レ興ヲ賞二閑一遊一

こゝを出て大国玉（おほくにたま）一八へゆく、これも両社ます、男体は大国玉（おほくにたま）の大神（おほんかみ）、これ大巳貴（おほあなむちの）大神なり、女体は活玉依姫（いくたまよりひめ）一九也、社領もあれど、神前いとをろそか也、水戸の西山殿二〇よりさきの社人へ、八張の神事をつたへ給はり、今もつとむ（務）といふ、まこと神前の八つあしに、そのさましたるぬさ（幣）なども、みゆ、国家安全のため奉幣料をたてまつりぬ、社人とおぼしきもの、布衣きたる二人、外に平服（平）なるひとり（一人）、ふたり（二人）いで来て、にはかに神楽たてまつる、社地はひら地なれば、けしき（景色）もよからず、たゞ筑波（つくば）・神波（かば）をちかくみるのみにて、前に田面をみわたす、華表（とりゐ）二のそと、ひだり（左）右に三尺ばかりのあやしきくす屋の内に、朽たる木、三本なゝめ（斜）にたてよせたり、長さ二尺あまりも有べし、左右ともにおなじ（同）さまなり、やうそあるらんととはせ（問）ぬれば、龍神をまつ（祀）れると云、そのかたはらなる木陰に、わらうだし（円座）・しかせ（敷）、かれ飯（乾）くひて（食）しばらくおる、大国玉の大神は、此国をおさめ給ふちから（カ）ある神なれば、野詩一絶神前へ奉る、

社頭駐レ馬ヲ有レ感而作ル

神産二八一圓一ヲ神築一成ス　民一生ノ安一毀領ノ精一明
天一尊有レ勅リ無二今古一　誰レガ不三慇一懃ニ祈二治一平ヲ

料紙もとゝのはざれば、とりあへずうすかみ（薄紙）に書てたてまつる、日やう〳〵かたぶくほどに、そこを出て、かへさ（帰）二三のみち（道）は三里ばかりと云、ゆき〳〵て小栗川の下なる横嶋川へ来ぬれば、日は入かたになりぬ、風もなくうらゝかなるけしき（景色）に、川水きよく（清）ながれて、日も山の（端）はちかくみゆ、餘光水にうつりて、くれなゐ（紅）をそゝぎたらんやうにてながる、浅き石川なれば、水のさゞ浪いさぎよく、いとおもしろきけしき（景色）也、こゝ（問）にしばらくやすらひ入日をながめおり、咽かはき（乾）ぬれば、湯やあるととふに、みちにて火をうちけし（消）てなしと云、この清き流をやくまん（汲）とおもふに、竹葉もたせ（持）ぬと供なるものゝいふ（言）に、さらば此川にてさかづき（盃）あらひ（洗）てくまと（汲）、心みに上よりながし（流）ぬれば、はやからず（速）とゞまらず（止）、よきほどに下（しも）へながれぬ、夕日かげ（陰）に水の色は桃花をうかめたるごとくに、曲水二三おぼえてみづからもくみて（汲）、かはき（乾）をやめ、ぐしたるもの、これかれつぎ〳〵川岸にゐならびて盃のながるゝまに〳〵かはる〳〵くむ、詩歌なくて、いたづらにくまんやとて、やたて（矢立）取出てかきつく（書付）、

眺ヲ二横一嶋一川ノ晩一景ヲ一与ニ二家一僕ト一坐ス二岸一頭ニ一、時ニ天一晴レ風一微ナリ、
臨テレ流ニ泛メレ盃ヲ更ク一酌ム、私カニ擬メ二曲一水ニ一賦ス二一一絶ヲ一

横一嶋清一川薄一暮ノ風　落一暉浸レ影ヲ水一波紅ナリ
曲一流更ク一酌テ銀一盃下ル　酔一裏詩一成テ吟未ダ終ヲレ

親誠また和歌を出す

嶋一川ノ夕一景起ス二涼一風ヲ一　返一照与ニレ盃ト一映レ浪ニ紅ナリ
盡スレ酔ヲ江一頭陪スル二宴ニ地　沈一吟ス佳一句興無シ終ルコトレ

かくいふうち日は入はて（果）ぬ、水あさ（浅）ければかちわたり（徒歩）にして、むかふ（向）より馬には乗、くれ〳〵に城へ帰りぬ、

廿五日　家僕の亭にてあそぶ、つねに出もせぬ、うたひ（謡）・しまひ（仕舞）わすれ（忘）もせねば、そゞのかされて、浦さびしくもあれはつる、跡の世までもなど二四、ひやうし（拍子）とりやゝたち出などして夜更ぬ、

閏五月二日、なぐさめにとて、常盤橋の家二五にをくり（送）し、

間適

好ー是柴ー門寂消レ憂ヲ　松ー楓蔽テレ日ヲ竹ー篁周シ
誦レ文ヲ苔ー榻移ス二明ー月ヲ一　曝レ布ヲ茅ー廛倚ル二碧ー流ニ一
耕ー馬労ノスルハレ田ニ何ノ所ゾズレ報ル　野ー禽啄ムハレ土ニ似タリレ無ニ求メレ
閑ー中得ノ意誰カ容シレ識ル　静ニ見レバ万ー山相ー対ノ幽ナリ

懐女ー子ヲ

兒ー女在リレ家ニ音ー問遠シ　忽ニ如シ二三ー月ノ一愛ー情頻リ也
夢ー魂不レ到ラ盤ー橋ノ下　毎ニ計ヘテ二秋来ヲ一涙満ツレ巾ニ

そのかへりごと、五日の文、六日につきぬ（着）、懐女子詩に、歌のかへしをしてをこせたりける、

児女在家音問遠
おもひやれをとづれとをき古郷も
おなじながめにかきくらす頃

忽如三月愛慕頻
あはでのみ過る月日のかず〳〵に
なぐさめがたき夕ぐれの空

夢魂不到盤橋下
いとゞさへおもひみだるゝひとりねの
かたしく袖は夢もむすばず

毎計秋来涙満巾
きのふとすぎ、けふとくらしてかぞへつゝ
秋まつほどの袖ぞ露けき

文をもなつかしくみる（懐）、けふさこそとおぼゆる事もおほかめる（多）、文の（言）こと葉はもらしぬ、
此ほどにてや有けん、蛍みむとて（見）五行二六の橋に出つ、去年（今日）みし（見）頃よりはをくれて（遅）蛍もうすくなりにし（薄）、されど宇治・八はし（橋）はしらず、こゝは蛍（蛍）のおほき（多）所なり、をよそのほたる（蛍）にたくらべていはく、三つばかりも合せたらん大さにて、もゆる（燃）光もをさ〳〵まさりぬ（多）、うちむれてとぶ（飛）さま、おほくあつまりて、雲ゐはるかに（星）ゆくけしき（景色）、水にうつろふなど（流）おかしさいはんかたなし、あるはほしのつらなりて（見）、ながるゝごとく（流）、あるはこがね（黄金）のくづ（屑）をうち散したらんやうにもみゆ（見）、橋の上にながめ（眺）おれば、ひとへすゞし（単衣）などにいくつもつきおる（付）、とらふる（捕）をもさしもいな（否）まず、ぐしたる（生絹）わらはがかみ（童紙）につゝみて（包）川づら（川面）へながしやる（流）を、せんなき事なせそとせいし（制）ぬれど、下へながれゆくまゝ紙にうつりて、鵜川のかゞり二七の、海龍王の塩みつ玉二八かなとおぼゆ

蛍ー火星ー流レテ簇ル二五ー行ニ一　清ー川熠ー々トメテ聚テ悠ー揚ス
丹丸作ルレ佩ニ今無シレ益　誰カ為ス三収ー来テ代ニ燭ー光ニ一

十四日（心地）　今宵は、庚申とてあそぶものもあるらめど、糸竹二九もつきなきこゝちして、つや〳〵ふくるまで月をながめふしぬ、

嬋ー娟タル明ー月照ス二幽ー扉ヲ一　雲ー収リ夜ー闌ニメル風入レ衣ニ
誰カ賞セン二故ー園濃ー露ノ色ヲ一　一ー方自ー是レ共ニス二清ー暉ヲ一

十五日　五行の橋に出て月を見おりて、

玉兎懸飛度二五行一　金波瑶水送二清涼一
幾千里外回レ頭処　新製布衣獨断腸

みやこにて官位あるものは布衣に混ずべからず、こゝはわたくしなれば、布衣をつけて節倹にならふをいふ也、

廿六日　けふより土用に入るといへば、ことはりしるくいとあつし、家のうちにゐなやみて庭の楓のかげにこも・むしろ・せんなど敷てあつさをわする、この楓いとあやしき老木なり、幾百年のよはひをかすぐし来ぬらん、ふたりしてかゝゆるにはなをあまりて、高さは三、四丈も有ぬべし、かゝる老木はかたはら枯などし、枝葉もしげからぬを、この木は枝葉さしかはししげりあひて、日のかげをもらさず、四方にたるゝ枝たをやかにしなひて、みどりの色うるはしく、つねに風そよぎていとすゞし、此下に来ぬれば、まづひやゝかに覚ゆ、根より上三尺ほどに洞穴あり、此うちよりいかなる日でりにも、ひるよるたえず水したゝり出てやまず、ゆへも有ぬけれど、まづはあやしくなむ、もてろうじて洞泉と名づけ、遊仙楓と号す、この木陰にて夏の空をわすれ、ひめもすこれかれかたらひて、かたはらなる木の枝折くべ、茶のみ酒わかす、ちかみつが詩作してみす、

賞大楓

雲接二館城一孤老楓　重陰欝々彩煙濃
拄二天翠蓋停二華露一　垂レ地緑條帯二薫風一
鴞到二黄昏一號二標上一　鷹飛二旭日一出二巣中一
由来霊質人争賞　況復素秋轉錦紅

和下沙棠三〇賞二大楓一韻上

逐レ陰開レ宴洞泉楓　高大盛茂緑色濃
不審由来生二滴水一　又疑何處引二涼風一
唱歌更挙青氈上　佳句忽成銀盞中
狂酔無レ辞新樹暮　豈期二秋節一枝紅一

おなじこゝろを

陰ふかくしげる楓の下すゞみ、
夏をわすれてけふもくらしつ
あつき日はつねにこの下をやどりとす、

六月二日　江府の本郷より小ばやしをおこせてとぶらひ給へり、きのふ来つきて、母君ばら三二から、これかれことなき事などとひきく、けふはれいの楓の下へいざなひ出て日をくらす、みやこ田舎の事、そこはかとなくかたらふ、このころひんがしみやこのことくさに、武蔵の府中にあやしき神いまして、人おほくまうで侍る、いかなる事にかと、そのよしをきけば、何がしが下部、太神宮へまうでしを、いとまもこはざりければ、あるじはらたてゝ、かの下部をうちなやまし、伊勢へぬけてまうでぬるはつねの事なるを、このあるじばら、あやしきものにや有けん、かくていかゞしけむ、あるじが手にはかにはたらかず、とかくするうち太神宮人にうつらせ給ひて、をのれ神をうやまふこゝろなきのみか、太神宮へまうでしにうちなやまし事と、しからせ給へば、かのあるじもつみをくへ、をこたり三三を申す、しからばかの下部にわびてゆるすといはせよ、さもあらばをのれも事なからんとの給はせしかば、そのごとくして、とく手もかなひいで、ことなかりける、太神宮おりさせ給ひし所とて、か

ろきほこらやうのみやをたてをけるとなんきゝつ、とふるもの男女をいはず、五里三里のほどよりきたりつたふて、かのみやをおがむ、奉行へうたへもせざりければ、とがめをうけて門とぢられなどす、参りくるもの五人拾人引もきらず、日々にいく千人といふ数しらずまうでくるほどに、そのことはりをいへど、きくもいれず、おし入り、なにのわかち三三もなく散銭なげなどす、二銭、三せんの数つもりて、人のたけとゞくばかりにつもりぬときこゆ、のちにきけば、人まどはすとて、おやこたくめるそらごとなりとも云、又たれか聞つたへて云、春日の御社の御戸をのれとひらけぬ、この御戸は勅封なれば、五月廿一日、京より御使ありて、勅封ありしに、其夜またをのれとひらきて、御帳のうらを見奉れば、黒き御扉にあかき御かげ、ちら〳〵うつらせ給ふ、御たけ七尺ばかり、仁王のごとくすさまじきほどにおがまれさせ給ふとなん、むかしよりこのたびと三度この御戸をのれとひらき、そのとしかならず豊年なるよしつたへいふ、又かたはらなるもの、ちかきほどにまうでたる僧のかたりしとて、御戸のひらけたるはしらず、よくきけば、春日の別社に若宮八幡宮おはします、五月の初頃、このひろ前へまうでたる社人、束帯のみかげ御簾のうちにうつらせ給ふをはじめておがみ、ふしぎにおもふ物から先は人にもかたらず、明る日まうでゝみ奉れば、又おなじさまにみたてまつる、ともなる社人につけしらせなどして、本社へもいざなひいきてみれば、本社もおなじく赤き童子などのみかたちに、御簾にうつらせ給ふを見奉りぬ、希異のおもひをなして、みやつかさなどへもきかせ、奉行へもうたへんやなどはからふうち、はやくきゝつたへて近郷の者群集してまうでくるれば、やむ事をえず、奉行へもうたへけるとなん、かたりしといふ、いづれがまことならん、しらず、

六日に小林かへりなんといへば、直好三四の御もとへことづてゝ、老楓の記三五ををくる、

老楓記

琴ー鶴ー翁三六

山者以レ有二喬ー木一為レ貴矣、園者以レ有二奇ー樹一為レ貴矣、夫喬ー木之為レ貴也、不二必摧而作一レ薪也、又不二必斲而作一レ棟也、唯異レ経レ年而備二之奇材一而ー已、夫奇ー樹之為レ貴也、不レ欲二炊而為一レ食也、又不レ欲二採而為一レ薬也、偏惜レ空レ時而備二之美ー観一而ー已、館ー城有二老ー楓一、其大也連ー抱、其高也数ー丈、陰之所レ庇度二車三ー十ー余ー両一、高ー標雲ー列、梟鷹與ー樓焉、低ー枝四ー垂鼈鼠同ー攀焉、夸ー條欞ー佹偃ー蓋、遮レ日而不二穿ー漏一、垂ー條扶ー疎翠ー粲、帯レ風而常清涼、根ー而ー上僅三ー許ー尺有二洞ー竅一、水ー滴流出而昼ー夜不レ舎、其経レ年不レ知二幾百歳一、亦足三以為二美観一矣、熟視二此樹一有二五奇一妙一、其老樹一奇也、其高ー大二奇也、其茂ー盛三奇也、其清涼四奇也、其美観五奇也、其泉ー滴則所ー謂一妙也、唯其老ー樹矣、故高ー大也高ー大矣、故茂ー盛也茂ー盛矣、故清ー涼也、總ー是美ー観也、奇皆相ー因、故列以為二五ー奇一、唯泉ー滴乃不レ知三其所ー二以然一、故以為二一ー妙一也、夏六ー月、節ー候甚欝ー蒸、與レ客遊二樹ー下一而置ー酒、歛ー熱不レ至、汗ー液不レ流、涼ー風凛ー然、宛如二九ー秋一、奴ー婢始知レ軽二絺ー綌一、鳥ー獣亦何厭二羽ー毛一、豈又為下煩結二涼ー棚一環中氷ー盤上乎、袁於レ是乎可二大ー飲一也、陶於レ是乎可二高ー臥一也三七、即名謂二之洞ー泉一、又號謂二之遊ー仙ー楓一、以ー為仙ー客毎ー来遊二樹下一也矣、既ー酔既ー夸而歌曰、

老ー楓兮老楓兮、何蓊ー鬱乎、崢ー嶸、吾始有レ先二於天ー地一、不二與レ汝比一レ生、吾大有レ充二於天ー地一、不二與レ汝争一レ榮、雲ー起兮風ー冷兮、與レ客酌酔未レ醒、

七日　城の乾の門を岡ぜり口三八といふ、そのかたはらより出れば、城のさかひにそふて、ながるゝ川あり、五行の川下なり、川のこなたにひろき芝間あり、芝のうちすきまもなくみな木賊なり、所ちかきもの、馬くさかるとて、おひたつまもなくかりとれども、なをおほく出づ、むかふの里をせんざい三九と云、この里のもの、此川にて木綿をさらしていとなみとす、五行さらしといふはこれなり、こなたの芝間よりみれば、木綿をあくにひたし、うすにてつき、川にてそゝぐ、おほくは男のわざなれど、女もいで、子どもゝ十四、五なるは、そのわざをなす、あるは棹にかけて水にすゝぎ、あるは両の手にもちてふりすゝぐ、いと手なれて布のまろく輪のごとくに廻り、あるはなみのうね〳〵ひらめく、川水は瀧などの石にあたりくだけちるごとく、浪の花よりはけう有てみゆ、むかふの河原に竹をいくつもたてならべ、布をかけて日にさらすこと、いくつといふ数をしらず、玉川にさらすてづくりおぼえて、これ又けうあるみもの也、夜は内に入れてきぬまきにかけてうつ、きぬたのをと夜半過る頃までは城へもまちかくきこゆ、川風すゞしくて、あつき日は夕がたこゝにたび〳〵いづ、けふは此川岸にて馬をあらふ、このあつさには馬もたえがたかめるを、すゞしき川水にうちいるれば、いと心よげにいさみいはふ、

河畔洗レ馬

牽レ馬洗二江畔一　夏天散二晩涼一
遊龍生レ澤躍　良驥仰レ雲驤
艸秣常為レ養　轡銜自レ莫レ傷
今多英傑士　誰不レ繫二名韁一

和沙棠、見洗馬韻

江頭洗レ馬立二斜街一　腕促蹄高躍二水崖一

清詞七歩存二回味一　物感有レ恒意也佳

この下、日はわすれぬれど、このほどなれば、こゝにみなしるしをきぬ、

和二徂徠翁、林臥雅韻一四〇

避レ暑林間睡　一方清冷天
氈施苔径上　扇致樹風前
佳句騒人骨　唱歌美婦妍
幾文章満レ腹　高臥乃便然

徂徠翁来詩林臥四一

夏木千草四二好　況逢二三伏天一
披レ襟風葉底　高レ枕露枝前
深映緑尊色　斜二窺纎月妍
似レ惹二南柯夢一　此意四三已恍然

賡二沙棠夜碪韻一

寂寥四顧少二人聲一　寒月三更度二邑城一
刀尺漸催急二碪杵一　今宵頻動故園情

和二幽居四四韻一

人世百年半得レ閑　春秋伴レ雁二與来還
断腸事々何為レ最　深夜砧聲響二後山一

廣下見二荷一花一韻上

荷葉花開緑点紅　午時土旺氣従中

宜哉曽有レ称二君子一　香満二水楼一池上風

十五日　家僕の亭にゆきて、月をみる

佳境風前詞客楽　閑庭林下玉壺清

今宵頃刻千金値　両好筑波月一更

注

一　直邦の経歴を簡単に述べると、寛文六（一六六六）年、中山直張三男として誕生。初名直重。母方祖父、館林藩家老黒田用綱の養子となり、黒田姓を名乗る。幼少より綱吉に仕え昇進し、元禄一六年下館城主一万五千石（後二万石）の大名となる。綱吉没後、家綱、家継の両将軍下では役職から離れ、吉宗の代に再び重用され、享保一七（一七三二）年、上野国沼田城主（二万五千石）となる。享保二〇年没。なお、黒田家に関する記録は、上総古文書の会により編纂、発行されている「御明細録」（『御明細録―上総久留里藩主黒田氏の記録―』、二〇〇六年）、「雨城廼一滴」（『雨城廼一滴―上総久留里藩主黒田氏の記録―』、二〇〇九年）、「黒田家臣傳稿本」（『黒田家臣傳稿本―上総久留里藩主黒田氏家臣の記録―』二〇一〇年）がある。

二　「史料紹介　暇之記　―下館藩主　黒田直邦による正徳三年の記録(一)―」（『小山工業高等専門学校研究紀要』四四号）では、江戸出立前日の正徳三年四月一四日から五月五日までを掲載した。なお、「暇之記」、黒田直邦についての分析、考察は、拙稿「下館藩主黒田直邦の暇―正徳三年「暇之記」に見える黒田直邦―」（『小山工業高等専門学校研究紀要』四二号、二〇一〇年）を参照していただきたい。

三　観音寺…茨城県筑西市（旧下館市）中館の寺。天台宗。
清瀧寺…茨城県筑西市（旧下館市）甲の寺。天台宗。羽黒神社の別当。
尊像寺…茨城県筑西市（旧下館市）成田の寺。天台宗。

四　中庸…中国の書。書は『礼記』のなかの一篇としてのちに伝えられた。今の『礼記』の第三十一篇にあたる。その作者や成立時期については古来諸説があって確定していない。（『日本国語大辞典』小学館、以下『国』と略す。）

五　せんど（先途）…これから先、進んで行くさき、なりゆき、ゆきさき、前途。（『国』）

六　周子…周公のことか。周公は孔子とならび称された聖人。／周公…中国、周時代の政治家。文王の子。武王の弟。名は旦。また、姫姓の旦であることから姫旦とも称した。諡（おくりな）は元、あるいは文。武王を助けて殷王紂を滅ぼし、内政を治め天下を平定。武王の死後、成王を補佐し、制度・礼楽・冠婚葬祭の儀などを制した。（『国』）
程子…中国宋代の儒学者、程顥（ていこう）、程頤（ていい）兄弟の尊称。二程子とも。（『国』）

七　四書…大学・中庸・論語・孟子の四部の書。朱熹（しゅき）がこの四部の書に集注を作ったところから、五経とともに、「四書五経」と称し、尊重されるようになった。（『国』）

八　大学…中国の経書。四書の一つ。孔子の遺書とも子思または曾子の著作ともいう。もと「礼記」の一編で学問の根本義を示す。朱氏の校訂によって現形に固定された。（『国』）

九　夕陰…夕方、物にさえぎられて日の光の当たらない所。（『国』）

一〇　靴下…蹴鞠のときのくつの音。（『国』）

一一　小栗山の神明…茨城県筑西市小栗（旧真壁郡小栗村）の小栗内外大神宮。

一二　小栗判官…説経節や浄瑠璃などに登場する伝説上の人物。また、それを主人公とした浄瑠璃作品。（『国』）

一三　ぎょうせん（地黄煎）…（「じおうせん」から「じょうせん」となり、さらに変化した語）水飴のこと。漢方の地黄を煎じたのに水飴を混ぜて、飲みやすくしたのが元で、のちにただの水飴や竹の皮に引き伸ばした飴、固形の飴の名称となった。（『国』）

一四　天正二年…西暦一五七四年。

一五　延宝…延宝は、西暦一六七三年から一六八一年までの九年間。

一六　神さびる…神々しい様子を呈する。古色を帯びて神秘的な様子である。古めかしくおごそである。（『国』）

一七　ちかみつ…大森親誠（ちかみつ）。黒田家家臣。直邦のそば近くに仕える重臣。「暇之記」に頻出する。

一八　大国玉神社…茨城県桜川市大玉国（旧真壁郡大和村）の神社。江戸時代は朱印地二十石。古くは東西に社殿があり、東を男体宮、西を女体宮と称して、神主二人で奉仕したという。徳川光圀が赤銅御鉾二、四神の御旗二、金銀箔の破連一対を寄進している（『茨城県　地名　日本歴史地名大系八』、平凡社、以下『地名大系八』と略す）。

一九　活玉依毘売（いくたまよりひめ）…陶津耳（すえつみみ）の娘。三輪の大物主神の妻。「古事記」には、この女性をヒロインとして、夜ごと訪れる男の衣に糸をつけ跡をたどって男の正体を知る三輪山伝説が見える。（『国』）

二〇　水戸の西山殿…徳川（水戸）光圀のこと。江戸時代前期の常陸国水戸藩主。晩年隠棲後は、西山と号した。

二一　華表（かひょう）…神社の鳥居のこと。（『国』）

二二　かえさ…帰りみち。かえるさ。（『国』）

二三　曲水…庭園や山野をうねり曲がって流れる川（『国』）。ここでは、曲水の宴に擬している。曲水の宴は、中国より渡来した宮中の儀式で、川に見立てた溝に水を流して、酒の入った杯が自分の前を流れ過ぎぬうちに詩歌を詠むというもの。

二四　浦さびしくもあれはつる跡の世まで…「浦さびしくも荒れはつる跡の世までもしほじみて、老の波も帰るやらん」。世阿弥作の謡曲「融」（源融）。

二五　常盤橋の家…直邦の妻（柳沢吉保養女、土佐子）や子供が住する、常盤橋にあった黒田家江戸上屋敷のこと。

二六　五行…五行川。栃木県から茨城県にかけて流れる川。勤行川とも。

二七　鵜川のかがり…「夕闇の鵜川のかがり下し過ぎて、あらぬ蛍ぞまた燃えてゆく」（「玉葉和歌集」）

二八　海龍王…海中に住み、海や雨をつかさどるという龍宮浄土の王。龍神。龍王。海龍。海龍神。（『国』）

二九　塩みつ玉…潮満瓊・潮満珠。潮を満ちさせる呪力があるという玉。満珠（まんじゅ）。しおみつに。（『国』）

糸竹…しちく。琴・琵琶などの弦楽器と笙、笛などの管楽器の総称。またそれらを演奏すること。糸竹管絃。いとたけ。（『国』）

三〇　沙棠…黒田家家臣か。不詳。

三一　母君ばら…同母兄の中山直好のこと。中山家当主。直好と母（慈光院）は、江戸本郷の屋敷に住する。

三二　怠り…自分の過失を謝ること。またその言葉。謝罪。（『国』）

三三　わかち…物事の区別、けじめ。（『国』）

三四　直好…中山直好。直邦の実兄。

三五　老楓記…兄直好の許へ送られた「老楓記」は、荻生徂徠の許へも送られたようである。「徂徠集」（平石直昭偏『近世儒家文集集成　第三巻　徂徠集　荻生徂徠著』、ぺりかん社、一九八五年。以下『徂徠集』）には、「琴鶴丹侯和予林臥詩併以霊楓記見寄再依前韻聊述其事奉呈」とあり、琴鶴丹侯（＝黒田直邦）が荻生徂徠の「林臥」の漢詩に対して詩を返し、「霊楓記」を徂徠に見せたことが分かる（注四〇参照）。「霊楓記」は「老楓記」を指すものと考えられる。また、「老楓記」は、茨城県立歴史館蔵の「黒田直重文集」中に、全文が載せられている。黒田直重は、直邦の初名。

三六　琴鶴…黒田直邦のこと。直邦は、琴鶴、瓊山と号す。

三七　袁於レ是乎可二大飲一也、陶於レ是乎可二高臥一也…陶は、陶淵明のこと。新田英治氏の御教示による。袁は未詳。

三八　岡芹…岡芹村は、下館城下西北の木戸に面して位置する（『地名大系八』）。

三九　仙在…筑西市（旧下館市）稲野辺村の地名。下館城下の北。木綿晒業は、下館地方のなかでも当村（＝稲野辺村。翻刻者注）の仙在橋付近がとくに盛んという（『地名大系八』「稲野辺村」の項）。

四〇　徂徠翁林臥雅韻…荻生徂徠の林臥の漢詩に直邦が返した漢詩。

四一　徂徠の「林臥」の漢詩。『徂徠集』にも見える。

四二　『徂徠集』では、「草」が「章」となっている。

四三　『徂徠集』では、「意」が「心」となっている。

四四　幽居…黒田家家臣か。不詳。

〔付記〕翻刻にあたっては、新田英治氏より多くの御教示をいただきました。記して謝意を表します。

※1　一般科（Dept. of General Education）ysakairi@oyama-ct.ac.jp

（受理年月日　二〇一二年九月二八日）